★ 抜粋箇所までのあらすじ ★

二十代前半の容姿のままで百年以上も生き続けている超絶超能力者クレインこと頼山紀博は、銀河連邦の植民惑星のひとつマスタード星で、仕事人――一般人には危険且つ困難な仕事を、特殊技能を活かして熟すことで多額の報酬を得る、世界の陰の部分を駆け抜ける存在――のコミュニティに、ハァタオという通り名を名乗って埋没していた。

一日、カラシナ・シティにある某施設への潜入調査の仕事を仕事人ネットで依頼されて引き受けた紀博が、施設周辺の下見に訪れたところ、敷地を囲む金網へひょこひょこ歩いて近付いてゆく若い娘が居た。その辺りに地雷が多数埋設されているとの事前情報を得ていた紀博は、急いで娘を呼び止め、地雷を踏まずに済むルートを通るよう案内する。

ところが、辿り着いたフェンス際から戻ろうとした時、きちんとよけて歩いた筈の地雷が、何故か次々と炸裂。娘が負傷しないよう密かに念動障壁併用で庇いながら脱出し、カラシナ・シティに到着したばかりで宿もまだ決めていないという彼女を、最寄駅の近くまで連れていったのだが……。

◆
◇
◆

「ちょ――ちょっと待ってっ」

背中から届いた声に、歩き出していた紀博の足が止まる。彼が肩越しに振り返るのと、焦った表情の娘が彼のコートの右袖を掴むのとが、殆ど同時になった。

「私、あそこで落としたのかも――即時決済用のカード!」

「え?」

「戻って探さなきゃ、何処かに泊まるどころかジュースの一本も買えない! ね、ねえ御免っ、付いてきてくれない!?」

「地雷満載のあの敷地に?」

冗談だろ、と返しそうになるのを堪えつつ、紀博は、努めて穏やかに続けた。

「……何処なら踏んでもいいか、覚えてないだろ。俺が拾ってくるから、此処の陰で待ってるといい」

持ち合わせは幾許かあったが、行き掛かり上仕方なく助ける羽目になった若い娘に更に貸しを作るのは避けておきたい――紀博は、掴まれていた袖をやや強引に引き戻すと、片手を軽く挙げておいてから足早に歩みを再開した。

手近な路地を曲がるや否や、瞬間移動で先刻の敷地に跳ぶ。星闇の中、地雷の残る箇所を透視で確かめつつ、フェンス際までゆっくりと歩を進める。

そこから〝逃走路〟を再度慎重に辿ってゆくと、右に十歩ばかりで、吹き飛ばされた地表に出会った。

(……これだ、踏んでもいないのに炸裂しやがった最初の奴)

左手側に五歩、これまた踏んだ覚えのない地雷の爆発痕を一瞥し、更に三歩前方、三つ目の爆裂箇所付近まで身を運ぶ。

……目当ての品は、幸いにも、その近くに落ちていた。

拾い上げて確認すると、カード残高は、チャージ限度額ほぼ一杯。そこそこの大金である。紀博は何となく苦笑いした。これは確かに、失くして焦るのも無理はなかろう。娘は今頃、さぞかし心細い思いをしているに違いない。

とはいえ、すぐにテレポーテーションで戻っては、娘の目から隠れて超能力を行使した意味がない。紀博は、さっき娘を連れて移動した時同様、無人タクシーを拾ってカラシード駅まで走らせた。行きだけでも相当の時間を短縮しているが、カラシナ・シティどころかマスタード星自体に来たばかりと話していた土地勘のない人間なら、そこまで不審がることはないだろう。

果たして娘は、紀博がどうやってそのカードを探してきたかを詮索するより、カードの無事を喜んだ。やれやれこれで面倒事は仕舞だなと安堵した紀博であったが、娘は、称讃と感謝の言葉をひと頻り述べた後で、思わぬ台詞を口にしたのだった。

「でね、あなたを待ってる間、駅の案内所でホテルの空きを調べたら、何処も満室って言われちゃって。悪いけど、あなたの家に泊めてくれない? ソファで寝るし、食費も払うから」

……嗚呼、面倒事は寧ろ今からが本番だったのかと、紀博は心密かに嘆息した。

――第一章「面倒事がやってきた」(仮)より

未来世界を生きる超絶超能力者の受難(?)を描く『レジェンダリィ・クレイン』シリーズの構想中作品から抜粋を切り出し、初の折本にしてみました(「ぺらふぇす2023秋」合わせ)。

作品タイトルや章題も含めて未定稿なので将来の刊行物では変わってくるかもしれませんが、その辺りは御了承くださいませませ。

物書きの卵に気を付けろ(仮)〈抄〉
―レジェンダリィ・クレイン―

初版発行:2023年11月23日
頒価:0円(無料配布)
著者:定行美佳(筆名/野間みつね)
発行元:野間みつね個人サークル　千美生の里
発行責任者:定行美佳
連絡先:https://mitsune.jp/
(※メールフォーム有)
©2023　Mika Sadayuki

★この本の一部または全部を、著者の許可なく転載・複写・複製・改変等することを、堅く禁じます。